

- 小規模多機能の強み

1. 時系列的に変化する、個別ニーズに柔軟に応える。

- ①これまで、サービスに合わせて利用者が移動する。から  
ニーズに合わせてもサービスは一定化。

2. そのため、適切なケアマネジメントが重要になる。

- ②これまで、要介護度(状態像)に対して区分支給限度額が  
決まる。さらに、サービスそれぞれに単価が設定されてい  
るので、サービスの量や組み合わせに拘らざるを得ない。

- 小規模多機能の課題

1. ヘビーユーザー問題

デマンド(要望)がニーズであると思い込み、過剰な要求に  
えてしまう

2. サービスの過少提供問題

サービス特に訪問に関してサービス提供が過少になる

3. 居住＋小規模による抱え込み

移動・送迎・訪問・宿泊ロスの解消が経営のメリット？

4. 包括報酬、自由な動きのできるサービス

何でもありではない

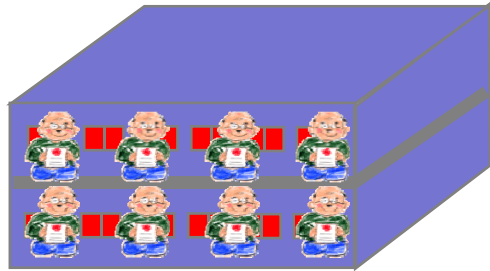
- 小規模多機能の今後を考える上で

1. いくつかの多様なサービス体系(小規模多機能)があってもよい
2. 包括報酬のサービスをわざわざ切り分けること(加算)ではない

ケアマネジメントの適正を進め小規模多機能のよさをニーズの多様性を認めるために、報酬、サービス体系とも進化していく必要がある。

# 地域を包括的にサポートすることができる報酬の設定が不可欠

## 入居施設型

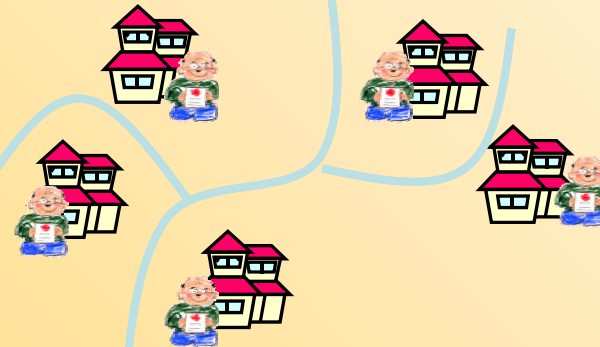


(効率重視)

- 宿泊者への対応  
容易(施設が自宅)
- 移動にかかるコスト  
少額(建物内移動)

## 小規模多機能型居宅介護

地域の中の25軒の家



(尊厳を重視)

複雑(地域をサポート)

多額(車等で移動)

私たちが目指すべき高齢者介護とは、介護が必要になっても、自宅に住み、地域の中で、家族や親しい人々と共に、不安のない生活を送りたいという高齢者の願いに応えること、施設への入所は最後の選択肢と考え、可能な限り住み慣れた環境の中でそれまでと変わらない生活を続け、最期までその人らしい人生を送ることができるようにすることである。(「2015年の高齢者介護」より)

# 小規模多機能型居宅介護の報酬に関する要望(単位:月額)

